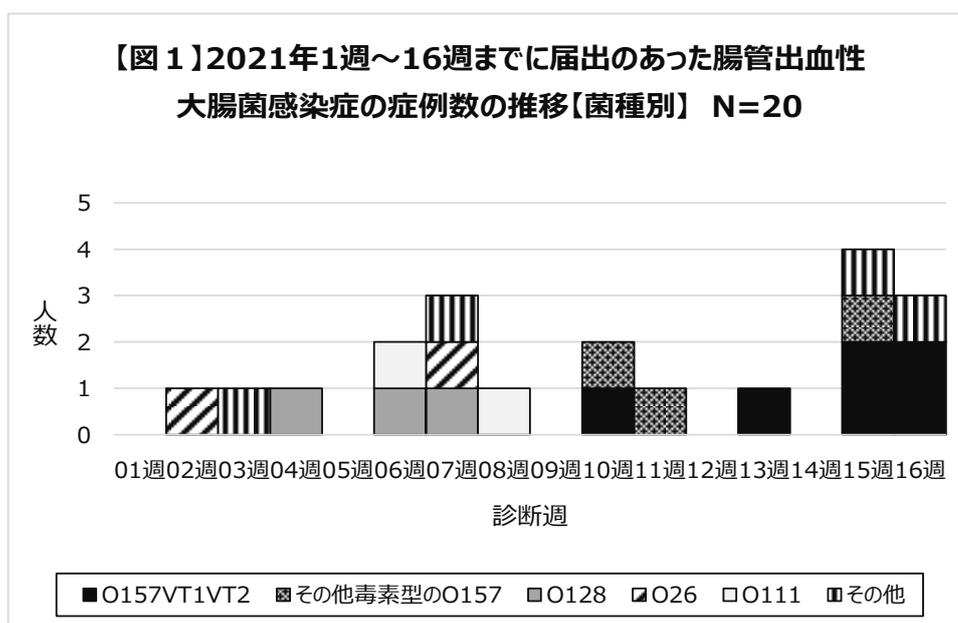


【今週の注目疾患】

《腸管出血性大腸菌感染症》

腸管出血性大腸菌感染症は2021年第15週から今週にかけて県内医療機関から7例届出があり、2021年の累計は20例となった。性別は男性8例/20例(40%)、女性12例/20例(60%)と女性が多く、年代別では30代以下が15例/20例(75%)と大部分を占めていた。発生地域別では千葉市保健所管内が7例/20例(35%)と最も多く、次いで海匝保健所管内で4例/20例(20%)の症例が確認された。O抗原と毒素型別では、前週と今週においてO157のVT1VT2がそれぞれ2例ずつ確認されており、他の種別と比べて多く報告されていた(図1)。



腸管出血性大腸菌が産生するベロ毒素(VT)は、その種類の違いによって重症度に違いが見られ、VT2産生株(VT1VT2もしくはVT2単独)はVT1単独産生株と比較して、有症状者の割合や血便を呈する患者の割合が高い傾向が見られる。国の報告によると、溶血性尿毒症症候群(HUS)を合併した症例79例のうちEHECが分離された50例中47例(94%)の毒素型がVT2産生株(VT1VT2もしくはVT2単独)であった¹⁾。

腸管出血性大腸菌はわずか100個程度の少量の菌数でも感染が成立するため、食品の調理時における野菜類の十分な洗浄、肉類の十分な加熱や生肉の喫食の回避、調理器具類の洗浄、消毒等、交差汚染を防止するための基本的な衛生対策を行うこと及び患者が発生した際は、家庭内や施設内等における二次感染を防ぐため、手洗いを励行することが感染予防のうえで重要となる。

また、近年の食品のデリバリーサービス利用者の増加や広域流通化に伴い、複数の地域にまたがり原因食品が喫食される可能性が上昇しており、広域食中毒事案も増加

傾向にある²⁾。原因食品が地元や近隣地域以外からもたらされる可能性も否定できないため、日頃より患者への聴き取りや他地域での食中毒等関連情報にも気を配ることが必要である。

《引用・参考》

1) 腸管出血性大腸菌感染症 2016年4月現在（国立感染症研究所）

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/ehec-m/ehec-iasrtpc/6472-435t.html>

2) 最近の多様な食中毒の対応について（厚生労働省医薬・生活衛生局食品監視安全課__平成30年感染症危機管理研修会資料）

<https://www.niid.go.jp/niid/images/idsc/kikikanri/H30/1-04.pdf>